

歌のゆくすえ 安田百合絵

青土社の「ユリイカ」8月号は、「新しい短歌、ここにありません」という特集タイトルを掲げ、誌面の大半を短歌に割いている。先鋭的なアニメ批評でも知られ、常に文化の最先端を走ってきた「ユリイカ」で、こうして短歌がとりあげられるという事実そのものが、示唆深いことだと思う。雑誌の表紙には、特集の邦題とともに「Tanka after the New Wave」という英語タイトルも記されていた。九〇年代前後に短歌の世界を席卷したライトヴァースのように、現在の短歌がポップカルチャー的な魅力を帯びた対象になっているのだと改めて不思議な感慨を抱かずにはいられない。

その「ユリイカ」を読みながら思い出したのが、「歌壇」6月号の特集「結社の進路——結社の近未来を考える」。それぞれの結社が現況や方針について書く「わが会のビジョン」が、「かなり暗い」という題の記事から始まっていたように、危機感があらわな、あるいは希望を語りながらもどこことなく歯切れが悪い文章が多いのが印象的だった。「ユリイカ」特集に見られるような短歌の一般読者への普及と、結社の焦燥とは、矛盾するようではないが、実はコインの表裏でしかないのだろう。吉川宏志は「ユリイカ」中の記事「比較の詩型」そして比較できないもので「好むと好まざるとにかかわらず、短歌は、古い歌と比較されることで歴史性を強く帯びる詩型である」と書き、フラワーしげるや瀬戸

夏子の歌を引きながら「過去の歌と現在の歌のつながりが見えなくなっている」と少し困惑気味に述べる。伝統と切れたところで、とりわけインターネットを主舞台として短歌が流通してゆく現在のトレンドに対し、結社はまだ距離をつかみかねている感がある。多くの人が指摘するように、いわゆるポストニューウェーブの歌の潮流は、〈私性〉のありようの変化と大きな関わりを持っている。大辻隆弘は、評論集『近代短歌の範型』において、「現代口語は、生き生きと明滅する『今』を記述することに秀でた言語体系である。(……)しかしながら、現在形を多用し、助詞・助動詞を排除した現代口語の文体では、かつて近代短歌が抽出した肉厚で彫りの深い作者像を作り出すことは難しい(……)」と書き、口語と文語という点から〈私性〉の問題を探ろうとしていた。蓋し秀逸な視点というべきであろう。

書肆侃侃房の文学ムック「たべるのがおせい」も、短歌と小説や翻訳を組み合わせているという点で、独自の試みである。小説と短歌をフラットに並べると、短歌の一首一首にこめられた言葉がいかに強度を備えているか、改めて気付かされる。

・海峡を越えてかすかに翳りゆく蝶のこころとすれ違いたり

服部万里子「ルカ」

・曇天に火照った胸をひらきつつ水鳥はゆくあなたの死語へ

大森静佳「はばたく、まばたく」

服部の歌は「てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行った。」という安西冬樹の詩を思わせずにはいない。大森の歌は写実的な実景に、意外な結句が深い陰影を添える。高度な文脈性と修辞性、歌のこうした古くからの魅力は結局不滅なのだを納得させる二首だ。